

＜北海道熊研究会 会報＞ 第81号 2018年 6月 22日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

既報会報の1～80号はWebsiteに「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致します

e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

＜106年振りに泳ぎ来た熊について＞

利尻島は北海道北西部の手塩町の海岸から海を約19km隔てた地所にある周囲50kmの島で中部に標高1721mの利尻岳をようし、低地から高山に至る地理的環境が多様で、30数年前の、私自身の調査知見だが、熊が餌とする陸棲草木・蟻類・海生動物(死体を含む)・海藻類などがあり、熊が10数頭は自活し得る陸島である。この島では1912年5月24日に、体長約2.3m(門崎の知見)の雄熊が島に泳ぎ来たのを漁師がを見つけ、海岸に泳ぎ戻ったのを、斧で捕った記録が唯一である。明治以降は、開拓は熊を殺し、熊の土地を奪う事であったから、往時は年に1千頭から2千頭も殺した。故に江戸期には、多数の熊が居て、手塩一帯の陸地は未開地で、熊が自由に人を気にせず往来し得た。熊は遊泳が巧みで、泳ぎを好む種で、30kmぐらいいは容易に泳ぐ。今回の熊が、利尻に泳ぎ渡った原因(動物の行動には、必ず原因と理由がある)、手塩の海岸に来て、海の先の山と森林を見て、そこが、如何なる所か、探索に来たと、私は見ている。この熊は①非常に慎重で、利口で、分別をわきまえ、しかも、好奇心旺盛な熊である。②北海道の自然を知り尽くしている。③人間の本性を知り尽くしている。④この熊は利尻島に居残るか、再び海を泳ぎ手塩の方に帰るか、の何れかであるが、「人が生物の一員として、他種生物に対し、人として為すべき、正しき道理、すなわち生物倫理の観点からも」静かに静観すべきである。この様な素晴らしい熊は、遺伝子としても、子孫に持続させる責務が、人類には、有るはずである。人はおごるべからずである。

北海道知事高橋はるみ殿

一般財団法人 日本熊森協会

2018年6月21日

(実践自然保護団体) 会長 室谷 悠子

～豊かな森を次世代へ～ 〒662-0042

(本部事務所) 兵庫県西宮市分銅町1-4

Tel : 0798-22-4190 Fax : 0798-22-4196

E-mail : contact@kumamori.org

利尻島のヒグマを捕獲(=駆除)しないでください

今回ヒグマが利尻島まで泳いで行ったのは自然の行為です。自然は守られねばなりません。以下は、当協会顧問で北海道野生動物研究所(電話011-892-1057) 所長門崎允昭氏(農学博士・ヒグマ研究第一人者)のことばです。当会も、同意見です。お知りおきください。

〈今回の利尻島のヒグマが人を襲うことはない〉

このヒグマは非常によく自然を知り尽くしている。それだけでなく、人間との付き合い方も知っている大変利口なヒグマである。このようなヒグマに危険性はない。たとえ人と遭遇したとしても、絶対に人を襲わない。私の過去50年間にわたるクマと人間の人身事故の検証結果から、100%自信を持って言える。最近の痕跡情報をみると、このヒグマは人目を避けて行動している。食べる物も山の中で採食して自活している。ニュースでは、民家の裏の畑でヒグマの足跡が発見されたとあるが、人が外に出ていない夜間にたまたま近くを歩いて移動しただけである。このヒグマに全く悪気はない。このクマは海を渡ってきて、新天地のどこにどんな食べ物があって危険な場所はどこなのかを、人と遭遇しない時間帯に歩いて探索している。このヒグマの動向を追い、「どこに痕跡があって、何を食べていて」という情報を盛んに洗い出して公表する事は止めるべきである。島民の恐怖心をあおるだけである。

〈利尻島にはヒグマが棲める豊かな自然があることを強調すべき〉

私はかつて利尻島で、もしヒグマがいたら生きていける環境があるのかという調査をしたことがある。北海道のヒグマが普段食べている木の実や草本、アリなどの昆虫がすべてそろっていた。年中食べるものには困らない。利尻島には、少なくとも10数頭のクマが自活できるだけの充分豊かな自然環境があり、それは世界自然遺産知床に勝るとも劣らない。それだけ豊かな自然がある島だということを、この機会に内外に強調して誇るべきである。

この自然は人間だけのものではない。命あるものは極力生かすべきである。クマ放獣体制のない北海道では、罠をかけて捕獲することは殺処分を意味する。絶対にやめてもらいたい。自然を大切にする立場から、今後もみんなでそっと見守るべきである。(丁)